

みやまきの 神楽

むらまつりに息づく
200もの多様な神楽



宮崎県

神楽の起源と分類

「神楽」というのは、神を迎えたり、災厄を祓ったり、神とともに楽しんだりするために神前に奉納する舞楽のことで、この芸能は「神遊び」の性格をもつともいえます。「神楽」という用語は、平安時代初めの大同2年(807)に斎部広成が著した歴史書『古語拾遺』が初見で、「猿女君氏、神楽の事を供る」とあります。この記録の「神楽」は、迎えた神をその場に依りつかせる鎮魂を目的としたと考えられます。

「神楽」の語原には諸説ありますが、この『古語拾遺』の記録とも関連づけて、神が依りつく場である「神座(かむくら)」の「む」が省略されたという説が有力です。宮崎県内に伝承されている神楽は、地域ごとに多様な姿をもち、神楽の場に設えられる「神座」にも豊かな地域色が見られます。

宮中での「御神楽」の成立は平安時代後期で、これは現在も行われていますが、これとは別に日本各地に在地の神楽が形成されていて、これは大まかに巫女神楽、採物神楽、湯立神楽、獅子神楽などに分類されています。

① 巫女神楽

神に仕える巫女が鈴や扇、幣などを持って舞う神楽。巫女が順めぐり、逆めぐりと廻旋を繰り返して神がかりとなり託宣を行います。巫女舞・神子舞・内侍舞などとも言われます。

② 採物神楽

神の勧請のための面を着けない採物舞と、神々や鬼神などを表わす面を着けた仮面舞で構成される神楽です。採物は舞うとき手に持つもの。採物舞と着面の舞を組み合わせた神楽は、九州の高千穂神楽・椎葉神楽・銀鏡神楽・球磨神楽、四国の本川神楽・津野山神楽、関東地方の太々神楽など全国に分布し、岩戸開きや大蛇退治などの神話に重きを置くところから岩戸神楽・神代神楽などと呼ばれることもあります。島根県佐太神社にこの神楽の典型がみられることから出雲系神楽と分類されることもあります。



採物神楽・上田原神楽(高千穂町)



高千穂町秋元集落

3 ゆたてかぐら 湯立神楽

祭場の中心に釜を据えて湯をたぎらせ、その湯を振りかけ穢れを祓います。愛知・長野・静岡の山間部の花祭や霜月神楽などでは、湯立を中心に翁・鬼・山の神・道化などの面を着けた能風の舞が見られます。伊勢神宮の外宮で行われたことから伊勢系神楽と分類されることもあります。

4 ししかぐら 獅子神楽

権現とみなす獅子頭の呪力で悪魔払いや火伏せ、息災延命を祈祷する神楽。青森・岩手・秋田・山形の東北4県などに、能舞のうまい・権現舞やまぶし・山伏神楽ばんがく・番楽・獅子舞などが伝承されています。



湯立神楽・大分県弥生町

みやざきの神楽の起り

みやざきの神楽の中で「高千穂の夜神楽」は全国に知られています。高千穂は、「天降於日向之高千穂二上峯」(『釈日本紀』)^(※1)とあり記紀神話の天孫降臨の場所とされています。また、明治以前は今の五ヶ瀬町・高千穂町・日之影町の西臼杵3町に東臼杵郡諸塚村を合わせた広域の地名で、中世の高知尾庄にほぼ合致します。

古い時代、高千穂は紀伊熊野神社の荘園でした。この荘園の各地に熊野神社が建てられ、熊野信仰が定着し、神楽も盛んに行われるようになりました。^(※2)熊野神社の支配下にあった当時の高千穂神社に伝わる文治5年(1189)の「十社大明神記」という文書に「七日夜の御じんらく」という記載があります。「じんらく」とは、神楽のことと解され、平安時代の末には神楽が存在したとされています。

また、諸塚村の日が暮神楽の資料には、天文15年(1546)の祭文や同16年の唱教、慶長14年(1609)の唱教など神楽に関する資料^(※3)が多数残っており、室町時代末には盛んに行われていたことが分かります。

県央の宮崎市やその周辺の神楽がいつ頃から始まったのかを明確に示す資料はありませんが、中世末に日向国を治めていた都於郡伊東氏が薩摩島津氏に破れ、島津氏が日向国を領有したとき宮崎城主となった上井覚兼



天孫降臨伝説のある二上山・高千穂町



熊野本宮・和歌山県



十社大明神と呼ばれた高千穂神社





十二人剣・高原町祓川神楽

という武将の日記^(※4)に「天正11年(1583)6月1日に折生迫^{おりゅうご}(宮崎市)の漁民が神楽を奉納して豊漁を祈願した」とか、「同14年9月28日、加江田(宮崎市)の伊勢社と諏訪社で神楽が行われた」といった記述があり、少なくとも中世末には神楽が存在したことが分かります。

県南部では、日南市に文禄4年(1595)の墨書がある神楽面らしき神面が存在していることから、県中部と同時期には神楽が行われたことが分かります。

みやざきの神楽は、古くは高千穂に熊野系の神楽が伝わり、その後、県中部や南部にも影響を与えています。



奉者舞・宮崎市細江神楽

みやぎきの神楽の特徴

① 地域住民による継承

宮崎県では鎮守社の祭日に住民が役割を分担し、神楽を奉納します。例えば、椎葉村^{ふだの}不土野^{ふつのお}地区には不土野・古枝尾^{ふるえだお}・尾前^{おまえ}・尾手納^{おてのう}・向山日当^{むかいやまひあて}・向山日添^{むかいやまひぞえ}などの集落があり、それぞれ集落名で呼ばれる神楽が存在します。かつては家ごとに役割が決まっており、父から長男だけに引き継がれ、使用する神楽面もその家が所有し、祭当日に持参していたそうです。しかし、過疎化や少子化により父子継承の形態は次第に困難となり、近年はそれぞれの神楽ごとに保存会を結成し、地区の縁故者や興味を持つ若者も受け入れるようになりました。

他県では神楽団、神楽座、神楽社中などを組織し、各地の神社に招かれたりイベントに参加したりするところもありますが、宮崎県内の神楽は地区住民の中に受け継がれている地域の芸能であり、他の地区の神社祭祀に招かれることもありません。



神楽の準備(外注連たて)・高千穂町秋元集落

② 神楽の数の多さ

平成4年に宮崎県教育委員会が県内の民俗芸能を調査しましたが、それによると太鼓踊りや棒踊りなど風流系^{ふうりゅう}芸能が235団体、念仏踊りや盆踊りなど盆踊系が144団体、神楽が204団体、他に獅子舞や田楽^{でんがく}



神楽宿に舞込む・諸塚村南川神楽

なども含めると700余の継承保存団体が確認されました。神楽は全体のおよそ30%を占めています。

また、同じ時期に県史編さん室は神楽が奉納されている箇所数を調査しました。こちらは、同郷の複数の神社に奉納される場合をそれぞれ数えており、350か所が確認されました(例えば、船引神楽は船引神社と同じ船引地区の^{ほのお}炎尾神社、大將軍神社にも奉納します)。

地域に伝承されている神楽の多さは、みやぎきの神楽の大きな特徴と言えます。

3 唱教・神歌

唱教は、舞手や太鼓方、控えの舞手が演目の由来を述べるもので、唱教(高千穂)、唱行(椎葉)、唱祈由(宮崎市)、唱儀(日南市)などと言います。また、神主と荒神が掛け合う問答もあります。

神歌は五・七・五・七・七の短歌の形をとり、演目に関する内容を唄うものです。



「安永」の唱教を唱える・椎葉村向山日添神楽

4 修験道の影響

修験道は、古来からの山岳信仰と仏教が結びついた日本独特の宗教であり、修行者である山伏が神楽を全国に伝える役割を果たしたと言われていいます。その影響はみやざきの神楽にも見られます。例えば、襦袢を嫌い、神楽関係の誰かが亡くなるとその年の神楽は中止します。高千穂神楽は、明治時代に唯一神道の影響があり、仏教色を一掃したと言いますが、椎葉神楽や諸塚神楽の唱教には神仏混淆の内容が顕著に残っています。また、赤青白紫(黒)黄の色御幣は陰陽五行説の影響で、天蓋などに挿す場合は幣の色と方角を一致させます。



錫杖上部の鈴に白舞衣、山伏を連想する・椎葉村向山日当神楽



御幣の色を方角に合わせる



舞処の上に吊る「きぬがさ(天蓋)」

みやぎきの神楽分布

◆高千穂系神楽

高千穂町・五ヶ瀬町・日之影町・諸塚村・
延岡市北方町

◆椎葉系神楽

椎葉村・五ヶ瀬町鞍岡

◆延岡・門川系神楽

延岡市・門川町

◆米良系神楽

西米良村・西都市(旧東米良)・木城町中之又

◆高鍋系神楽

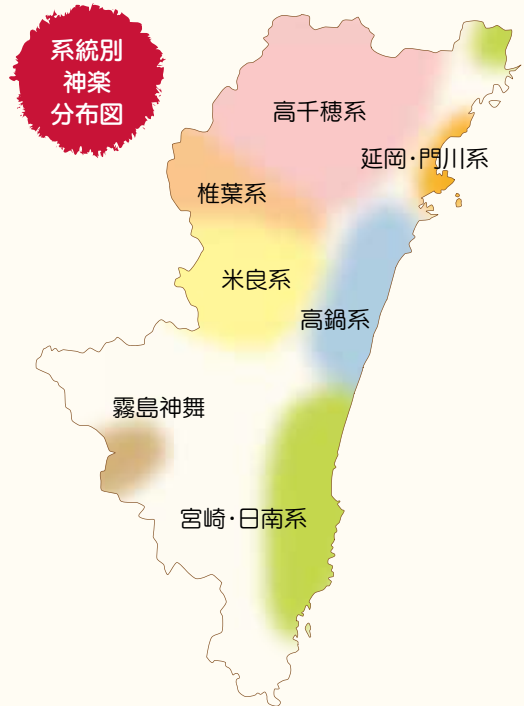
高鍋町・木城町・川南町・都農町・新富町
美郷町南郷区

◆宮崎・日南系神楽

宮崎市・日南市

◆霧島神舞

高原町



「宮崎県史資料編・民俗2」第9章 神楽より作成



諸神観請・高原町祓川神楽(上) 手力男・日南市瀧上神楽(右上)
田ノ神舞・宮崎市内小松神楽(右下)

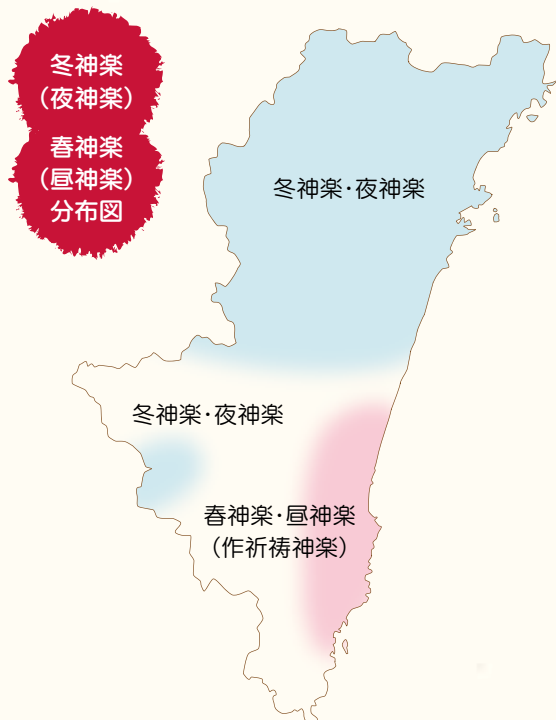
冬神楽・春神楽

宮崎県では「夜神楽」とか「春神楽」といった表現をよく耳にしますが、これらは神楽が行われる時間帯や季節による言い方です。

11月になると高千穂町や西都市(銀鏡やおほえ尾八重)、椎葉村など県西北部の山間地域で神楽が始まり、12月には盛んに行われます。年明け1月には高鍋神楽や諸塚神楽があり、2月まで続く高千穂神楽で冬神楽の時期は終わります。かつてこの地域では焼畑が行われました。冬季にヒエ・アワなどの収穫を感謝する神楽が奉納され、それが今に続いています。夜神楽とも呼ばれ、夕方から翌朝9時頃まで続きます。

宮崎市や日南市など県央・県南の平野部では、2月に日南市から神楽が始まります。稲作の準備に先立ち秋の豊穰を祈念して行われるので、「作神楽」、「作祈禱神楽」と呼ばれ、5月頃まで続きます。現在、平野部では早期作水稲が導入され、神楽の時期には田植えが既に終わっているところもありますが、かつて普通作を行っていた時分の風習として奉納されています。午前10時頃から午後4時頃まで行われる昼神楽が中心ですが、生目神楽のように午後1時頃から真夜中まで行われる「半夜神楽」もあります。

このようにみやざきの神楽は、県央を境に県北部の冬神楽・夜神楽、県南部の春神楽・昼神楽と大きく二分されます。また、県西部の高原町(はらいかわ)と狭野の(さの)「神舞」は12月に奉納されます。これらは夜を徹しての神楽ですから、冬神楽・夜神楽ということになります。



「宮崎県史資料編・民俗2」第9章 神楽より作成



柴引・高千穂町上田原神楽(上段) 田植え・延岡市北川町黒内(下段左) 焼畑火入れ・椎葉村佐礼(下段右)

高千穂の夜神楽

国指定重要無形民俗文化財

高千穂の夜神楽は、町内に伝承される神楽全体を指し、国の重要無形民俗文化財に指定されています。この高千穂系統の神楽は五ヶ瀬町や日之影町、延岡市北方町鹿川辺りまで分布しています。

古くに紀伊の熊野信仰の影響を強く受けており、高千穂各地に勧請された熊野神社では、少なくとも平安時代末には熊野修験による神楽が成立したとされています。高千穂神社では「荒ぶる神・鬼八」を鎮める猪掛け祭りの中で、奉納された猪を前に「笹ふり神楽」が舞われますが、これが高千穂神楽の原型とされています。



高千穂峡



鎮守熊野神社から舞い込む・上田原神楽(上) 高千穂神楽の原型、笹ふり神楽(右上・右下)



町内の神楽は演目も舞順も概ね同じです。まず、神を迎えに鎮守社に参り、神事の後、御輿を先頭に神職や地区役員などが後に続き、舞手が道神楽を舞いながら神楽宿へ向かいます。神楽宿に着いたら、「舞込み」が行われ、舞処まいどに神を迎えます。

神楽宿では御神屋みこうやを清めて神を降し、「御神屋はじめ」の唱教で始まります。演目は「彦舞」から「太殿たいどの」、「神降り」と続き、太刀を採物とする「太刀神添たちかんぜ」や「岩潜り」、弓矢・鉄砲を持つ「山森」などが舞われ、真夜中には増殖を表わす「御神体ごしんたい」、また、夜明け頃には、「伊勢神楽」「鈿女うずめ」「手力雄たちからお」「柴引しばひき」「戸取ととり」「舞開まいびらき」の一連の岩戸開き関連演目が奉納されます。高千穂神楽ではこれらを最も重要な演目と位置付けています。手力男が岩戸を開き天照大神を導き出す舞が展開する頃、山の端から陽がさし、神楽宿は、再びこの世に光を取り戻した神話の世界そのものとなります。

町内神楽のうち向山黒仁田神楽では「杵舞きねまい」、「箕舞みまい」など田植神楽が舞われます。この演目は宮崎市から日南市に分布する「作神楽さくかぐら」の代表演目であり、小型にした農具を持って舞う清武今泉神楽の「サキト(作祈祷)舞」、日南の「八鋒舞」にも類似しています。

また、黒仁田神楽では白布を両手で振りながら道行きの案内をしますが、これは日之影町おおひとの大人神楽や諸塚村の桂神楽の影響を受けたと伝えられています。今は日之影町、諸塚村、高千穂町と行政区を異にしていますが、明治以前は同じ郷内で神楽も影響があったのでしょう。



神楽宿へ向かう・上野神楽



戸取・上野神楽



太伊殿・芝原神楽

日之影・五ヶ瀬の神楽



日之影町

五ヶ瀬町

日之影神楽 県指定無形民俗文化財

日之影町では大人・大菅・鹿川の各集落おおひと おおすげ ししがわで高千穂系神楽を伝承しています。大人神楽は、午後4時頃に舞込みがあり、翌日正午頃まで続く長丁場の神楽です。また、神楽宿でオンノメカズラ(野ブドウ)による清めから始まり、舞手や氏子がカズラの輪潜りをします。これを「すがもり」と言い、これを済ませた氏子たちは鎮守社である岩井川神社に神迎えに出立します。



神迎え・日之影町大人神楽(左)



幣神添・日之影町大菅神楽(右上)
雲下ろし・鹿川神楽(右下)

神社での神事のあと、拝殿で「迎え神楽」を奉納し、白布で清めて神渡しを行います。

その後、道神楽を舞いながら神楽宿に向かいますが、神職の大幣を先頭に猿田彦、天神、土地神、舞手、氏子など総勢5、60人が、急で長い石段を舞いながら下る様子は、まさに天上の神々が降臨するようです。神楽の特徴は「天神様の舞」や「太子様の舞」で、土地神が出座します。太子様は諸塚太白山たいはくさんに由来する神です。日之影町内の神楽も「舞開」に至る岩戸開き関連演目が重要演目に位置付けられており、手力が児童の演じる天照の両手を持ち膝で移動しながら導き出す舞開は感動的です。

大菅・鹿川両神楽も概ね高千穂系の神楽ですが、どちらも「彦舞」はなく、また、鹿川神楽には高千穂には無い「蛇切り」があります。

五ヶ瀬神楽 五ヶ瀬町指定無形民俗文化財

三ヶ所さんがしよ・室野むろの・古戸野ふるとの・桑野内くわのうち・鞍岡くらおかで神楽を伝承していますが、いずれも高千穂系夜神楽です。ただ、平家落人が鞍岡に隠棲して神楽を伝授し、更なる奥山を求めて椎葉へ向かったと伝えられており、鞍岡祇園神楽には椎葉神楽の情調もかすかに感じられます。

鎮守社での神迎え、着面の祝子、道行の奏楽、演じられる演目にも多少の違いはありますが、概ね高千穂神楽と同じです。唱教に「妙権菩薩(妙見菩薩)」とか「御ソワカ」、だらにきょう「陀羅尼経」など仏教用語が再三出てくることから、高千穂神楽の祖形を残しているのではないかとされています。



舞開・日之影町大人神楽

諸塚神楽

県指定無形民俗文化財・記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

諸塚村には南川神楽、戸下神楽、桂神楽が伝えられています。宮崎県では「神楽三十三番」と言い、通常、演目は33ですが、南川の演目は37番、戸下は50番を数え、どちらも夜神楽です。桂神楽は、桂八幡神社や諸塚神社の春秋の例大祭に3番が奉納されますが、遷宮や社殿改築、お日待ち、大願成就など特別なときには大神楽22番が奉納されます。2015年の大神楽は朝9時に始まり翌朝9時まで行われました。

南川と戸下の神楽は演目等も似ており、同系の神楽と言えます。南川神楽の岩戸開きの演目は「伊勢」、「岩戸上」、「柴取」、「戸取」、「岩戸下」、「浮輪取」の6番があります。岩戸を開けて天照を導き出す神は手力男命が定番ですが、南川・戸下神楽では春日大神となっています。

戸下神楽の大神楽で演じられる「山守」は、山から下りてきた山の神守りと神職との間で長い問答を展開するもので、椎葉村の獄之枝尾神楽の「宿借り」に似た要素を持っています。

神高屋を民家に接して床高に設えることや、神楽宿近辺の民家を「脇宿」と定め、来賓や観客の接待をすることなどは諸塚神楽の特徴と言えます。

一方、桂神楽は、高千穂系神楽である大人神楽(日之影町)や黒仁田神楽(高千穂町)に類似しており、台所から束にした榊柴を担いで荒々しく神高屋に持ち込む「柴入れ」や、柴にまたがった荒神一方・荒神二方と神職との長い問答は見る人に感動を与えます。



床が高い神高屋・南川神楽



神楽せり歌で盛り上げる・戸下神楽
(上)
天照が出られる時、東の空が白む・戸下神楽
(右)



荒神と問答する柴入れ・桂神楽

椎葉神楽

国指定重要無形民俗文化財

椎葉神楽は、椎葉村内26か所に伝わる神楽全体を指します。椎葉神楽にも「手力^{たちから}」、「紫引^{しばひき}」など岩戸開きに関する演目がありますが、高千穂神楽における「岩戸五番」ほどの位置づけではなく、また、高千穂では殆ど舞われない「綱切^{つなきり}」、即ち「八岐大蛇^{やまたのおろち}退治」の物語が嶽之枝尾^{たけのえだお}や桐尾^{つがお}、大河内^{おおかわち}、合戦原^{かせばる}などの神楽で演じられます。

高千穂神楽で仏教色が一掃されたのと対照的に、椎葉神楽は唯一神道化の影響がみられず、神仏混淆の唱教が多く残されています。例えば嶽之枝尾神楽の綱荒神問答では天照大神の本地を釈迦如来、春日大明神の本地を阿弥陀如来とし、桐尾神楽でも柴荒神で天照大神の本地を大日如来といいます。これは仏が神の姿でこの世に現れるという考えです。他にも舞で使う鈴は錫杖^{しやくじょう}杖上部に似たものを使うなど修験色が強く残っています。

高天原^{みこうや}や御神屋飾りが終わると「板起こし」を行うのも特色の一つです。「板起こし」は、舞処の中央で豆腐を猪肉に見立て、切り竹串に刺して塩をふり、囲炉裏^{あぶ}で炙って食するもので狩猟神事です。尾前神楽の板起こしでは猪の頭が使われます。



夜食の振舞い・向山日添神楽



国の重要伝統的建造物群保存地区の十根川集落



焼畑ソバ畑・椎葉村向山日添(左上)
しめぐち・栗の尾神楽(左下) 宿借り・嶽之枝尾神楽(右)



地割・仲塔神楽



椎葉村

たけのえだおかぐら 嶽之枝尾神楽

「宿借り」は他ではあまり見られない演目です。一人の男が宿を借りたいと申し出て、宿主と問答を展開します。宿主は、初めは断る雰囲気ですが、訪ねてきたのが山の神と分かると応諾するという内容で、これに似た演目としては、諸塚村の戸下神楽の「山守やまもり」があります。カズラを巻き付けた山の神が神職役の舞手と約1時間、問答します。嶽之枝尾神楽には「注連引き鬼神しめひききじん」という勇壮華麗な演目や4人が一糸乱れず舞う「神粹かんすい」などもあります。



カズラの霊力で身を祓う・栴尾神楽



狩法神事板起こし・尾前神楽

つがおかぐら 柁尾神楽

演目の多さ、夜中に神社に舞台を移して神事を行うこと、カズラを潜ったり越えたりする「つがもり」があることなどが特徴です。「つがもり」は身を清めるもので、日之影町の大人神楽でも行われますが、他では見られない貴重な神事です。これは、6月晦日みそかの夏越なごしの祓はら具ぐの菅貫すがぬき（茅ちの輪）と同じ性格をもちます。



生魂殿・尾前神楽

おまえかぐら 尾前神楽

尾前神楽の「板起こし」は、狛師が神前に供えられた猪の頭をヤマガラシ（短刀）で撫でながら「諏訪すわの祓はらい」を唱えて霊を鎮め、それをまな板に移して肉を刻み、竹串にさして松明しょうごんので炙ります。また、「生魂殿なごんどの」では、「神酒を頂きたい」と村人数人がいろいろな理由を古風な言葉遣いで述べますが、神職は応じません。数組が次々と断られ、最後の組になってようやく「言上がよかった」と神酒が渡されます。この神職と組代表の掛け合いが笑いを誘います。また、「弓通しゆみとお」では2張の弓を重ねて両側から弦を引き、乳児の健やかな生育を祈念してその間を通します。子ども達の後は、希望者は誰でも潜ることができます。この弓通しは尾向地区及び不土野地区などの神楽でも行われます。

米良の神楽

国指定重要無形民俗文化財

米良とは、一ツ瀬川上流域に位置する西米良村や西都市尾八重・銀鏡、木城町中之又を指し、菊池氏(米良氏)が治めていた江戸時代には「米良山」と言いました。

昭和52年に西都市の銀鏡神楽が「米良神楽」として国の重要無形民俗文化財に指定されましたが、令和5年に尾八重神楽、中之又神楽、越野尾神楽、村所神楽、小川神楽の5つが追加され、指定の名称は「米良の神楽」に変更されました。

米良系神楽の特徴は、鎮守社や摂社の神々が登場することです。祭りは摂社の神々を鎮守社に迎えるところから始まり、番付でも土地神が入座する演目が重要とされ、最高の神格として演じられます。もう一つの特徴は狩猟習俗を表現する「シトギリ」(銀鏡神楽)、「狩面」(村所神楽)、「カクラ神楽」(中之又神楽)などの演目があることです。そして、尾八重や銀鏡では、猪の霊を鎮める「シシバ祭り」という神事が、神楽と並行して、または、神楽が終わった翌日に行われます。

カクラは元々、猟場を表わす言葉ですが、小集落に祀られるカクラ社は氏神としての性格を帯び、祭りには集落の子どもや老人をはじめ全員が参加します。尾八重には湯之片や岩井谷など9つのカクラ社があり、祭日には神楽が奉納されます。また、銀鏡の12のカクラ社でもかつては神楽が奉納されていました。焼畑を荒らす猪は害獣ですが、貴重なタンパク源を提供する山の神の贈り物でもあり、それを鎮送する考えは椎葉神楽の「板起こし」に共通するものです。



奉納された猪首・銀鏡神楽



面様迎え・銀鏡神楽



シトギリ・銀鏡神楽

しろみかぐら 銀鏡神楽

銀鏡神楽は、宿神社や六社稲荷などの土地神を鎮守社に迎える「神迎え」から始まります。

天和年間(1681~84)、濃砂淡路守という社家が鶴戸山(日南市鶴戸神宮)に出仕して「鶴戸神楽」、「鶴戸鬼神」を修得したと伝えられ、この系統は「鶴戸門流」と言われています。

「西之宮大明神」、「宿神三宝荒神」は地主神であり、最高の神格として御神屋に迎えられます。動きはゆったりとして腰を落とし、威厳ある舞が演じられます。高千穂系神楽で重要視される「岩戸開」は銀鏡にもあり、「伊勢神楽」、「手力男命」(たろからのおのみこと)など3番が舞われます。「伊勢神楽」で岩戸縁起を唱えますが、他所では余り見られません。



また、夜を徹した神楽31番が終わった翌日の午後に演じられる「シトギリ」では、爺と婆、狩行司が登場し、狩猟独特の言葉に地元言葉を交えて面白可笑しく狩りの様子を演じます。これは古い狩猟習俗を伝えるものとして国の文化財に指定される要素の一つとなりました。

おはえかぐら 尾八重神楽

保安2年(1121)、いさうたのかみゆきのぶ老岐宇多守幸延が尾八重湯片に移り住み、この地に神楽を伝えたと言われています。同じ東米良の銀鏡神楽とはいくぶん趣を異にすると言われますが、しゆくじん「宿神」など地主神の舞を重要視するのは銀鏡神楽と同じです。白装束に太刀を持ち、4人がからす「烏跳び」で軽快に舞う「綱神楽」は山伏を想起させ、また、終盤の「百二十番」は、結願を祝って観客も舞所に入り喜びを表します。これは、観客全員に御幣を配り、願成就を喜び椎葉向山日添神楽の「太平楽」に類似しています。



注連立て前の神事・尾八重神楽

むらしょかぐら 村所神楽

南北朝時代に懐良親王を奉じて米良の地に住むようになった菊池氏が、文明3年(1471)に懐良親王を祀る大王宮を建立し、その鎮魂の神楽を奉納したことが村所神楽の起源とされています。祖霊神のだいおうさま「大王様」(懐良親王)やはちまんさま「八幡様」(村所八幡)などを重要な演目としており、「八幡様」の演舞が始まると被り物を脱ぎ合掌する氏子の姿を見かけます。村所神楽も銀鏡や尾八重と同様、狩り神事に関する演目があり、「シトギリ」に似たかりめん「狩面」もあります。



八幡様・村所神楽

高鍋神楽

県指定無形民俗文化財・記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財



高鍋藩であった高鍋町・木城町・川南町・都農町・新富町三納代に伝承する夜神楽を総称して「高鍋神楽」と言います。ここでは神楽の奉納を「大神事」と言い、白鬚神社(川南町)、平田神社(川南町)、八坂神社(高鍋町)、愛宕神社(高鍋町)、比木神社(木城町)、八幡神社(新富町)の六社が輪番、または連合で行います。元々、各地区で奉納していましたが、衰退著しく、昭和30年代に5町の神職有志により保存会が結成され、現在に至っています。

比木神楽はこの年巡の神楽とは別に独自に夜神楽を奉納しており、六社連合の年番に当たる年は大神事を兼ねています。比木神社には百済王族伝承の「福智王」を祀っており、同じ伝承をもつ美郷町神門神社の祭神「禎嘉王」を、息子「福智王」が訪問する師走祭りが毎年行われています。両社はおよそ90km隔てており、かつては9泊10日の行程で、途中ゆかりの地や神社で神楽が奉納されました。そのため、順路に当たる日向市東郷町や美郷町南郷区の神楽に影響を与えました。これらの地域の神楽が高鍋系神楽と言われる由縁です。

比木神楽の「節舞」では、「霧島の峯より奥の月晴れて 新たに拝む天の逆鋒」という神歌が歌われ、霧島信仰が窺えます。因みに、江戸時代、高鍋藩の下級武士や農民の多くが「霧島代参」をしたことから、藩は安永5年(1776)9月9日に「近年猥に霧嶋代参大勢さし越し候につき御停止」^(※5)として霧島代参を禁止しています。



花の手・高鍋神楽



将軍・高鍋神楽



宮神楽・比木神楽



順路の神楽に影響を与えた師走祭

美郷町の神楽

美郷町

日向市

平成の市町村合併前の旧南郷村・旧北郷村・旧西郷村(それぞれ現在の美郷町)と旧東郷町(現在の日向市東郷町)は入郷と呼ばれ、行政区画は異なるものの、行政・経済・風俗習慣など共通する文化圏を形成していました。

この地域には、百済王族に関わる師走祭に伴い旅の途中で比木神楽が奉納されたため、順路となる日向市東郷町や美郷町南郷区に高鍋系の神楽が定着しました。

また、美郷町西郷区には椎葉・米良系の若宮神楽のほか、椎葉村と諸塚村の神楽の影響を受けた島戸神楽が伝承されています。若宮神楽は、田代神社大祭で12番が舞われ、また、御田祭のときには神田脇で「地割」や「鬼神」など7、8番が奉納されます。このほか、北郷区の宇納間神楽や人下神楽など高千穂系の岩戸神楽も伝わっています。

これら美郷町内の神楽は夜神楽ですが、現在、その多くは夜半で終了します。



裸馬で田を起し、その後早乙女が田植えをする・御田祭



大身先・島戸神楽



鬼神・若宮神楽

みかどかぐら 神門神楽 県指定無形民俗文化財

禎嘉王を祀る美郷町南郷区の神門神社では、師走祭りでは比木神社の宮司・氏子一行が来訪した2日目に、神門神社の氏子によって半夜神楽18番が奉納されますが、その内15の演目は比木神楽と重複しています。

神門神社が鎮座する南郷区は、江戸時代には延岡藩であり、村内には高千穂系・椎葉系・米良系の神楽が混在しているにもかかわらず、神門神楽が「高鍋神楽」として県文化財に指定されたのは、比木神楽との深い関わりがあったためと思われる。



比木神社一行を迎える・神門神社

宮崎平野の神楽

宮崎平野の神楽を見ると、平成の市町村合併前の旧宮崎市・旧清武町きよたけ さどわらと旧佐土原町・新富町しんとみでは、少し趣が異なっています。

旧宮崎市では23か所で神楽が伝えられていますが、田の神舞たのかみまい・杵舞きねまい・箕取り舞みとまいなど稲の豊作を祈念する演目があり、「作神楽」さくかぐら、「作祈祷神楽」さくきとうかぐらと呼ばれます。

それに対し、旧佐土原町や新富町の新田・富田は佐土原藩だった地域で、ここでは稲作に関する演目がありません。また、佐土原藩は薩摩の支藩であったため、政治的、経済的に薩摩藩の強い影響を受けましたが、庶民にまでは薩摩文化は浸透しなかったようで、薩摩の神舞の影響は見られません。この地域の神楽の特徴は、何と云ってもワラ製の大縄を大蛇に見立て、真剣で一刀両断する「蛇切り」じやきり、「綱切り」でしよう。



田の神・上小松神楽



金山・高屋神楽



神武・生目神楽

い き め か ぐ ら 生目神楽 県指定無形民俗文化財

い き め
生目神社で午後2時頃から夜半まで奉納される
半夜神楽です。演目も多く、宮崎市を代表する神
楽と言えます。一人剣・二人剣・二刀などの剣舞、
つるぎまい
弓矢を採物にする将軍舞、それに、杵舞・田植舞・
田の神舞などの作神楽が演じられます。

「方社」ほうしゃ、「稻荷山」いなりやま、「里人」さとびと、「陰陽」いんよう、「神武」じんむの

5番の演目は関連しており、一括りにして「岩戸神楽」と言います。「方社」や「稻荷山」などに5神が順次登場し、天照のお出ましを祈る演目で、「陰陽」と「神武」が共に祈ることで天照の受諾を得るというものです。しかし、後半にも岩戸開きに関する「太玉」ふとだま、「柴荒神」しばこうじん、「鬮開」ひやくかいの3番があり、岩戸開きの場面が重複しています。平野部で舞われていた神楽の演目に高千穂神楽が伝わる中でこのような展開となった可能性もありますが、定かではありません。かつてこの演目は、宮崎神宮や島之内八幡神社など宮崎平野では広く舞われていました。

生目地区では、生目神楽の他に跡江・上小松・下小松・細江・長嶺などで神楽を伝承しています。



ふなひきかぐら
船引神楽 県指定無形民俗文化財

宮崎市清武町の船引神社境内で行われる昼神楽です。午前8時半頃に注連柱立てが始まり、午後4時頃まで演じられます。演目の前半と中盤に「神体舞」、「柴鬼神」、「戸開鬼神」と岩戸開き関連の演目があり、「めご舞」、「箕取舞」、「杵舞」が終盤に舞われます。岩戸開きよりも稲作豊穰に重きを置いた配列であり、船引神楽は代表的な作神楽といえます。この船引神楽は、船引郷内の炎尾神社と大將軍神社にも奉納されます。



メゴ・船引神楽

にゅうたかぐら
新田神楽 県指定無形民俗文化財

新田神社の拝殿と境内に設えた舞処で朝5時から夕方5時頃まで奉納されます。新田神楽で最も重要とされる演目は「綱切り」です。長さ6~7m、太さ20cm位のわら縄を大蛇に見立て、真剣で一刀のもとに切断する勇壮な演目です。「蛇切り」とも言われます。真剣で斬る「蛇切り」は、巨田神楽(宮崎市佐土原町)、鹿野田神楽(西都市)、富田神楽(新富町)など佐土原藩だった地域やその周辺の穂北神楽などに伝承されています。



綱切・新田神楽

また、新田神楽にも生目神楽の「岩戸神楽」と同じ「大神神楽」があり、「ホッシャ(法者)」が「稻荷山」、「尉」、「陰陽」、「神武」の神々を導き出します。「陰陽」の演目のときに「神明もはや御受納と見えて…」と、天照が承諾したことを喜び、神武を呼び入れて神楽を奏し、最後に神武が太鼓のいわれを唱え、「太鼓破り」して一連の舞は終わります。

日南の神楽

日南市では2月初旬から5月下旬にかけて30か所の鎮守社境内で神楽が奉納されます。演目は10番から15番があり、午前10時頃から午後4時頃まで行われます。「箕舞^{みまい}」や「杵舞^{きねまい}」などがあり、宮崎市辺りと同じ作神楽といえます。

海岸に近い地域の神楽には「鵜戸舞^{うどまい}」、「魚釣り舞^{うおづりまい}」と呼ばれる海幸彦・山幸彦神話に関わる演目があることが特徴です。1月10日に市内の各漁協で豊漁^{りょうかくら}を祈念して奉納される神楽を「漁神楽^{りょうか}」、「恵比寿神楽^{えびす}」と呼び、このとき「鵜戸舞」は必ず舞われる演目となっています。

日南の神楽でも岩戸開きに関わる「柴荒神^{しばこうじん}」や「手力男^{たちからお}」などの演目があり、手力男が演舞の最後に幕を引き下ろすと、鏡と宝珠を持つ天照が現れるという趣向となっています。



鵜戸神社



柴舞・上方神楽



魚釣り舞・潮嶽神楽

うしおだけかぐら 潮嶽神楽

2月11日、日南市内で最も早く奉納される神楽の一つ。神事後、「福種下ろし」という作占^{さくうら}が行われ、その年の作柄を宮司が告げて種粉を撒きます。これを拾って自家の種粉に混ぜると豊作になるとされており、氏子は争って拾います。この後、4人の女兒^{みこまい}による御神子舞が奉納されます。神楽は境内に設えた舞処で12番程度が舞われますが、山幸彦が釣針をなくしたこと、豊玉姫が鵜戸の岩屋^{うがやぶきあえずのみこと}で鵜草草葺不合命^{さかほこ}を産むことなどを唱教^{ほこまい}で唱える「魚釣り舞」や、霧島山高千穂峰の逆鋒の由来を唱える「鋒舞」などが重要演目とされています。



神楽奉納前に行われる神事「福種下ろし」・潮嶽神楽



日南海岸



日南市

日南の神楽に残る薩摩系神楽の痕跡

薩摩系神楽を伝承する高原町では神楽を「神舞^{かんめ}」と言います。日南市萩之嶺神楽の神歌集にも「神舞」とあり、高齢の社人は「神舞」と言っていました。また、高原の「神舞」と同じ演目「龍蔵」と「鋒舞」が日南の神楽に存在します。「鋒舞」は霧島の逆鋒を意味する演目で、「霧島」とも言い、重要視されます。「霧島の峯より奥の霧はれて 現れ出ずるその峯の神」の神歌は祓川神楽の「鋒舞」と同じです。

飢肥藩成立以前の中世、薩摩島津氏は今の日南市を含む南九州を領有していたことから、これらの地域に薩摩系神楽が行われていたことは十分考えられます。天正13年(1585)11月14日の『上井覚兼日記^{うわいかくけん}』に、富士(日南市)の猟場で鹿2頭を仕留め、伊比井神社宮司が酒肴を持参した。そのとき宮司は覚兼に「神舞」見物を誘った記述があります。また日南市には文禄4年(1595)の神楽面らしき神面も残っています。

中世薩摩の影響をうかがわせるものとして、日南市田之上八幡神社の弥五郎人形があります。都城市山之口の弥五郎、曾於市岩川の弥五郎を合わせて3兄弟と言われる薩摩大型人形です。また、都城や小林など薩摩藩だった地域は河童を鹿兒島県と同じガラッパと言ひ、日南市もガラッパ、串間市もガラッパと言ひます。同じ民俗文化を共有しており、これらは、飢肥藩成立以前の民俗文化と思われまふ。^(※6)

江戸時代に宮崎市南部を含む飢肥藩が成立しますが、それに伴ひ宮崎市辺りの「作神楽」が浸透し、それまでの神舞と融合して現在に至ったのではないのでしょうか。



龍蔵・日南市九社神楽



鋒舞・潮嶽神楽(左) 手力・九社神楽(上)



鵜戸・日之御崎神社神楽

高原の神舞

国指定重要無形民俗文化財

宮崎と鹿児島県の県境に位置する霧島山は複合火山で、山麓に霧島六所権現が鎮座する信仰の山です。天曆年間(947~957)に性空上人がここで修行し、山麓各地の霧島信仰を霧島六所権現に統一したことが山岳修験などの性格をもつ霧島山信仰に大きな影響を与えました。霧島山にある「高千穂峰(矛峰)」には天孫降臨神話が伝えられ、頂上には邇邇芸命が立てたとされる「天逆鋒」が立っています。日本書紀に「日向襲之高千穂峯」とあり古くは高千穂峰(東峰)と御鉢(西峰)を合わせて二上峰とも言いました。(※7)



天孫降臨伝説がある高千穂峰

高原町には霧島六所権現であった霧島東神社(別当寺錫杖院)と狭野神社(別当寺神徳院)が鎮座し、霧島修験の影響を受けた薩摩系神楽(神舞)の「祓川神楽」と「狭野神楽」が伝えられています。これらの神楽は「高原の神舞」という名称で重要無形民俗文化財に指定されています。

はらいかわかぐら 祓川神楽

舞処である「講庭」の四方に「法珠門」、「福德門」、「延命門」、「成就門」の鳥居が立ち、中央に「天照皇大神宮」の切り文字を付けた天蓋が下げられます。これは他にはない設えて、舞手(社人)は霧島東神社氏子であることが条件となっています。

祓川神楽は真剣を持つ演目が多いのが特徴で、中でも小学校低学年男児が、大人の舞手の両脇から差し出された真剣の切っ



剣・祓川神楽

先を素手で握って舞う「剣」や、12人が真剣を持って勇壮に舞う「十二人剣(中人り)」は他に例がありません。

また、山の神と躰(神職)が長い問答を行う「門境」は椎葉村の嶽之枝尾神楽にある「宿借り」に似た演目です。「宿借り」は山の神が神職に宿を乞うのに対し、こちらは躰が山の神に宿を乞うものです。

祓川集落では神楽奉納の日には昔からどの家も雨戸を開け、神楽を見に来た人々にソバを振る舞う風習があり、現在も行われています。



十二人劔・祓川神楽

さのかぐら 狭野神楽

狭野神楽も真剣を採り物にした演目が多く、番付33番中の11番が劔舞です。これには薩摩劔法の示現流ひんづるぎが基層にあると言われていいます。劔舞の「踏劔」は祓川の「劔」と殆ど同じで、7歳の男児が凛々りりしく舞う様は見る人に大きな感動を与えます。

また、ここには平野部の神楽と同じ名前の演目があります。例えば、「田の神」や「箕舞」は作神楽みまいの主たる演目であり、「金山」や「宇治かなやま（宮崎では氏舞）」は生目神楽や高屋神楽などで舞われます。しかし、「箕舞」のときに肩の上に舞手を乗せて箕を振るしぐさ以外は舞の所作が異なっています。



神師・狭野神楽



箕舞・狭野神楽



踏劔・狭野神楽

県北東部の神楽

延岡市北浦町の農山村部である三川内^{みかわうち}地区は、「岩戸開」を重要視する「歌系神楽^{うたいと}」、「梅木神楽^{いちびうち}」、「大井神楽^{いちびうち}」、「市尾内神楽^{いちびうち}」、「下塚神楽」を伝承しており、総称して「三川内神楽^{みかわうち}」と言います。これら5つの神楽の演目や舞順、舞い方は概ね同じで、拝殿を舞処とし、畳2畳の広さで舞うこと、そして、「もじり反閉^{へんぱい}」と呼ぶ足運びなどが特徴です。大分県蒲江の丸市尾にもこの三川内神楽が伝わり、舞い方や太鼓の打ち方など幾分異なるところもありますが、同じ演目名の舞が行われています。



弓の舞・延岡市大峽神楽

また、海岸部では市振神楽^{いちぶり}を伝承しています。かつては各集落に神楽がありましたが、次第に廃れたことから、昭和58年に「海岸部神楽保存会」を結成し、市振神楽が各地区を廻って奉納しています。同じ町内の三川内神楽とは演目や舞の所作が異なり、別系統の神楽と言えます。

また、延岡市北方町では上鹿川^{かみしがわ}・美々地^{みみち}・菅原^{すげばら}・荒平^{あらかへら}・早下^{はやしも}に神楽を伝承しています。そのうち鹿川地区中村の「上鹿川神楽」は高千穂系の夜神楽です。明治25年に高千穂町二上神社の田尻宮司と神楽頭取から習ったもので、番付を記した文書が授与されています。「彦舞」が無く、舞順も幾分違うところがありますが、高千穂神楽とほぼ同じです。神楽宿に接して舞処を設えるのは諸塚神楽に似ています。

このほか、延岡市には伝統的な神楽とやや趣を異にする「延岡神楽」、門川町にも同様の神楽が存在します。



繰り降り・三川内歌系神楽



柴引・三川内歌系神楽



伊勢神楽・上鹿川神楽

福井県に伝わった日向神楽 福井県指定無形民俗文化財

福井県坂井市丸岡町^{のうね}長畝には、みやざきの神楽が伝えられ、長畝地区の八幡神社で毎年9月第3土曜日に奉納されています。

元禄4年(1691)、延岡藩主有馬清純が越後国(新潟県)系魚川、さらに、同8年、越前国(福井県)丸岡藩に転封となりましたが、その際に延岡藩の神楽の舞手を連れていき、この地にみやざきの神楽が伝わったものです。廃藩置県により一時途絶えましたが、有志によって再び舞い継がれるようになりました。

土曜日の宵宮で「散米」、「剣の舞」、「日の舞」、「柴引」、「問」、「手力男」、「戸取」、「真の舞」、「獅子舞」が、翌日の本祭では「置位」、「綱切」、「策神楽」、「大蛇の舞」、「注連」、「柴荒神」などの演目が奉納されます。「柴引」や「戸取」、「手力男」など高千穂神楽と同じ名前の演目がありますが、長い年月を経る中で舞の所作にも変化が見られます。



長畝の八幡神社



丸岡城

参考資料

山口保明『宮崎の神楽』鈺脈社

柳 宏吉『山岳信仰からみた高千穂』『山岳宗教史研究叢書13』名著出版

小手川善次郎『高千穂神楽』小手川善次郎遺稿出版会

宮崎県教育委員会編『宮崎県民俗芸能緊急調査報告書—宮崎県の民俗芸能—』

椎葉村教育委員会編『椎葉神楽調査報告書第二集・第三集』

高原町教育委員会『高原町文化財調査報告書 高原町祓川・狭野の神舞—本篇—』

みやざきの神楽魅力発信委員会編『みやざきの神楽ガイド—その歴史と特色—』鈺脈社

※1 柳 宏吉『山岳信仰からみた高千穂』『山岳宗教史研究叢書13』名著出版

※2 『日向国高千穂庄神社仏閣神体仏像改控』佐藤文書

※3 渡辺伸夫『宮崎県諸塚村日が暮神楽資料』『演劇研究』第15号抜刷

※4 東京大学史料編纂所『大日本古記録上井覚兼日記』上・下 岩波書店

※5 宮崎県立図書館『宮崎県史料第三巻 高鍋藩続本藩実録(上)』

※6 前田博仁『宮崎の妖怪セコ・カリコ』『みやざき民俗』62号

※7 山本盛秀『三国名勝図会』

みやざきの神楽～“むらまつり”に息づく200もの多様な神楽～

宮崎県総合政策部みやざき文化振興課

平成27年9月18日 初版 6,000部

平成28年2月20日 2刷 10,000部 (公財)みやざき観光コンベンション協会

平成30年2月23日 3刷 6,000部

令和6年3月27日 4刷 1,000部

文・写真は宮崎民俗学会会長の前田博仁さんに、

監修は國學院大學名誉教授の小川直之さんにお願しました。



椎葉村嶽之枝尾神社・注連引き鬼神



日本の
ひなた
宮崎県

宮崎県総合政策部みやざき文化振興課

〒880-8501 宮崎市橋通東2丁目10番1号

TEL : 0985-26-7099 / FAX : 0985-32-0111



Facebook
「神話のふるさとみやざき」



神話のふるさとみやざき